

令和3年度 豊かな環境づくり大阪府民会議報告・発表会 議事録

ゼロカーボン・ダイアローグ

「アート×社会×アクション 先駆者と語る 地球の今と未来」

大阪府、豊かな環境づくり大阪府民会議、
おおさかATCグリーンエコプラザ

2021年6月27日

1. 日時 令和3年6月27日（日）午後2時00分～午後5時30分まで
2. 場所 オンライン（Zoomウェビナー）、おおさかATCグリーンエコプラザ
（大阪市住之江区南港北2丁目1-10 ATC・ITM棟11階西側）
3. 出席者数 125名
4. スケジュール
 - (1) 開会挨拶 金森佳津氏（大阪府農林水産部環境政策監）
 - (2) トークイベント① 谷口貴久氏（「地球を守ろう！」代表）
 - (3) トークイベント② 長坂真護氏（現代美術家）
 - (4) アイデア発表 「万博×環境 未来を描こうプロジェクト」学生メンバー
 - (5) トークセッション 「アート×社会×アクション 先駆者と語る 地球の今と未来」
コーディネーター：花田真理子氏（大阪産業大学大学院）
パネラー：谷口貴久氏、長坂真護氏、
未来を描こうプロジェクト学生メンバー
 - (6) おおさかATCグリーンエコプラザ 事業・施設紹介
 - (7) 閉会挨拶 東実行委員長（おおさかATCグリーンエコプラザ）

5. イベント概要

- (1) 開会挨拶 金森佳津氏（大阪府農林水産部環境政策監）

異常気象や生態系への影響などの気候変動の深刻化を受け、2050年までに脱炭素社会への転換が必要とされており、大阪府では今年新たな計画を策定し、2030年までに40%の温室効果ガスの削減を目標として掲げ、2050年の区域におけるCO2排出量の実質ゼロを目指した取り組みを加速させていると説明があった。

本イベントでは、地球規模の社会課題に対して、環境以外とのコラボレーションの中で様々な活動を行う講師2名を招き、対話を通じて脱炭素社会への転換に向けて意識と行動を変える契機となることを目指すと説明し、開会した。

- (2) トークイベント① 谷口貴久氏（「地球を守ろう！」代表）
「気候危機の実態と私たちにできること～みんなが知れば必ず変わる～」

■自己紹介

こんにちは。谷口貴久です。

ご紹介いただいたように、直近はドイツに住んでいました。ドイツで知った地球温暖化、気候変動の実態を日本の方々にも知って欲しくて、昨年から本格的に日本国内をお話しながら回っています。

今日のように、たくさんお声がけをいただけることで、講演活動を始めてから1年ちょっとですが、今日で646回目の講演になります。

毎日、各都道府県を移動しているので、家に帰る暇がなく、家賃を払い続けるのがもったいないと感じ、昨年、ドイツの家も日本の家も解約しました。現在は世界のどこにも家がない状態で毎日どこかのホテルを転々としながらお話をさせていただいています。すると、先日久しぶりに自身のウィキペディアのページを見ると、「ホームレス環境活動家」と書かれていました。

ということで、「ホームレス環境活動家」の谷口貴久です。今日は、よろしくお願ひします。

出身は大阪なんですけど、どうしても大学からイギリスに留学したくて、10代から企業をしてお金を貯めてイギリスに留学しました。卒業後は、ドイツで起業しました。どんな企業かというところ、ドイツやフランスにすでにある、プラスチックごみ問題の解決につながる

商品を日本に輸出するという企業です。

レジ袋やペットボトル等のプラスチックごみは30%が自然に流れ出ていると言われていきます。流れ出たごみは、海の生き物が餌と間違えたり、体にごみが絡まることで、10万以上の海洋生物が死んでしまっていると言われていきます。

このプラスチックごみは自然界で分解されないもので、これからも私たちが今のペースでプラスチックごみを出し続けた場合は、あと30年以内に、海洋生物よりも海を漂うプラスチックごみの方が多い「ごみの星」になると言われています。

そういうことを解決するためにドイツで起業していました。

そういう仕事をしていたのですが、ドイツやイギリスなどではこの3年間程、地球温暖化・気候変動に関することがトップニュースになっていました。「私たちの家が火事です」「人間が住めない地球になってきています」という報道に日々触れている中で、「本当に大変なことになっている」と感じ、先ほど紹介した会社は閉じて、現在は気候変動を止めるための活動をしています。

■今、地球で実際に何が起きているのか？

気候変動が原因で起きている異常事態の中で、特に2020年に起こったことを中心に、「火災」「台風・豪雨・洪水」「氷がとける」についてお話をさせていただきます。

・火災について

オーストラリアでは、気候変動が原因となった火災で、2000以上の家が燃え、約30億の動物が焼け死んだと発表されています。日本では、最近は報道されることがありませんが、オーストラリアの火災は現在も続いています。例えば、ここ72時間の間にもオーストラリア全域で火事が発生しています。

この火災が起こっている原因は、気候変動により、世界中で乾燥が進行していること、つまり干ばつが発生していることです。それに加えて、40℃超えの日が続き、樹脂（油）が多く含まれるユーカリが自然に発火し、火事が起きている。

一方、アマゾンの火災はオーストラリアとは原因が違います。アマゾンでは、人間が火をつけています。まだ原住民や動植物が生活している、「地球の肺」と呼ばれるアマゾンに人が火をつける理由は、私たちが日々食べている「牛肉」にあります。

地球上に5000種類以上いるとされる哺乳類のうち、人間と畜産動物（牛や豚等）の割合は96%を占めています。どう考えても異常な状態になっています。

私たちが日々購入する100g 100円程で売られているお肉（特に牛肉）の餌となるトウモロコシや大豆を育てる土地を確保するために、人間が空からガソリンをまいて火をつけて燃やしています。国産の牛肉であっても、餌は海外からほぼ全て購入しています。

これが一つ目の火災です。

・台風/豪雨/洪水について

今、温暖化で海がとて暑くなっています。温暖化で増えている熱のうち、90%以上は海に入るため、海水温度が急激に上昇しています。海が熱くなると、海からあがる水蒸気量が増えるため、台風、豪雨、豪雪が多発し、これまでにないような規模で発生しています。2月には、ブラジルで子どもが立てないほどの豪雨が多発し、たくさんの方が命を落としていて、国家として非常事態宣言を発令しました。同じ2月、スペインでは超大型の波を伴う嵐が起きている。7月には日本の九州を中心に、老人ホームや病院がまるまる水に沈むような豪雨と洪水が発生し、70人が命を落とし、135万人が避難生活を送っています。先月もインドで1週間に2回のスーパーサイクロンが発生し、100万人以上が避難しています。

これが二つ目の台風、豪雨、洪水です。

・氷がとけるについて

2019年7月は人類の歴史上一番暑い1カ月間だったと公式に発表されました。そのとき、私はドイツにいました。ドイツは、とても涼しい国なので、基本的にクーラーはありません。それにも関わらず、ドイツでは42.6℃、フランスのパリでは46℃まで気温が上昇しました。人が耐えられる気温は41℃とされています。なので、ヨーロッパで7万人以上が暑さで死亡しています。子どもが学校に行くために外に出ると死んでしまうような気温ということで、夏は学校を封鎖しました。電車のレールが暑さによって膨張して脱線事故を起こしたので、ドイツ全土で電車を停止しました。

去年はさらに暑い日が続いていて、歴史上一番暑い1年間だったとNASAが発表しました。8月17日に日本で歴代最高気温を記録しましたが、同じ日のアメリカカリフォルニア州の気温は、地球上で観測された気温で最も高い54.4℃でした。想像がつかないですね。

この気温上昇によって、先ほど紹介したオーストラリアの火災と同様の火災で、過去最悪のものがアメリカで発生しました。9月だけで東京都9個分が焼けました。僕の知り合いのお母さんもこの火災で命を落としました。カリフォルニア州の知事が、「未だに気候変動が嘘だと思っている人がいるなら、今すぐカリフォルニア州に来れば分かる」と世界に向けて発信しています。

アメリカや日本と比べるものではないですが、南極では去年の2月に観測史上最高の+20℃を超え、一週間ちょっとで南極の島の4分の1の雪や氷が溶けて海に流れ出ています。これによって海面上昇が起こり、アメリカのフロリダ州では、晴れの日でも道路が洪水しています。

反対側の北極圏は、2020年6月9日に気温が初めて38℃に達し、1日に100億トンを超える氷が溶け続けていて、雪や氷がなくなっています。基本的に人類は資源が豊かな沿岸部に住んでいるので、このまま海面上昇が続くと、住んでいる場所や資源が失われていて、残った資源の奪い合いが世界的に加速するといわれています。

2021年2月に行われた国連の安全保障理事会では、気候変動と戦争の繋がりに重点を置いて話されており、日本の防衛省でも5月に、気候変動が安全保障に与える影響や今後海面上昇によって領土や資源をめぐる争いが活発化する恐れについて議論を始めています。

気候変動で一番最初に失うものは「自然」ではなくて「平和」だといわれています。そもそも、現在当たり前のように映る「平和」というものは、先をきた人たちが命がけで勝ちとってくれたものです。僕たちが守り続けられない限り、まだ100年も続いたことがあります。なので、気候変動に取り組むことは「偉い」とか「意識が高い」とかではなく、気候変動に「無関心」でいられる人はいても、「無関係」でいられる人は一人もいません。僕は、自然とか動物よりも人間が好きで、平和を守り続けたいのでこの活動をやっています。

この話を聞いている方々はもともと気候変動に関心のある人が多いと思いますが、関心のない人からすると知らないことばかりです。気候変動という問題の一番大きな希望は、まだ誰も知らないということです。こういう問題を詳しく勉強している人に限って、こんなに大変なことになっているのに、みんな知らないことが絶望的だと言いますが、逆です。みんなが知っているのに、そんな深刻な状況まできているのであれば、それが一番絶望的です。人は、知っていてやっていること、わざとやっていることは、これからも変えません。しかし、単純に「知らなかった」という人が、自分の日々の選択が気候変動に繋がってきているということを知り、自分の日々の選択を少し優しく見直すだけで全然違う未来がつくれて、自分や自分の大切な人の未来を守れるということに気づいて日々の行動を変えるということは多くの人に可能なことです。

深刻な状況まできていることは事実ですが、まだ多くの人がそれを知らないということが一番の希望です。みんなが知れば、必ず変わります。

今お話ししたことはすべて、地球の温度が上がることによって起きています。約200年前

にイギリスの産業革命が起こってから、約1.1℃上昇したとされています。1.5℃の上昇を迎えると、後戻りができない気候大惨事を招く可能性が高いため、1.5℃未満に抑えようといわれていますが、2018年のIPCCという国連気候変動に関する政府間パネルの報告書によると、このままのペースで温室効果ガスを出し続けた場合、あと6年と半年ほどで1.5℃の上昇を迎えてしまうといわれています。

ドイツのベルリンやニューヨーク、イギリス、韓国のソウルなど、世界の主要地ではこの気候変動のタイムリミットを示す「気候時計」が設置されています。僕も今、渋谷のスクランブル交差点に置けるように動いています。

このような状況の中、世界中で子どもが学校に行かなくなっています。小学生、中学生、高校生などの子どもが、平日に学校をボイコットして、街中に集まって車線を塞ぎ、デモを行っています。これが珍しいことではなく、ドイツ全土、1日に500カ所以上、140万人以上の人がやっているため、私は一番近い場所で行われていたデモに参加しました。

僕が参加した集会の主催者は14歳のテラちゃんという中学2年生の女の子で、友達と二人でインタビューさせてもらったことがあります。なぜ学校に行かずに活動をするのかを聞くと、「大人たちに言われた通り、学校に行って自分の将来のために勉強して分かったことは、このままでは私たちに安全な将来は存在しないということ。大人たちは、口では子どもが一番大切と言うが全員口だけで、私たちの将来を守ろうとしている大人を見たことがない。大人たちが気候変動に他人事で子どものような行動を続けるのであれば、子どもである私たちが自分事として大人のように振るまってこの問題をどうにかする」と話してくれました。僕はこの子のような子どもたちに口だけの大人と言われたくなかったので、この活動をしています。

一つ目は、日本で全然報道されていないので、僕らが住んでいる地球で一体何が起きているのかについてお話をさせていただきました。

■ どうやったら変えられるのか？

次は、どうやったら変えられるかについてお話をさせていただきます。

イギリスの学者で、気候変動だけでなく、世界中で起きている色んな問題を研究してきた方が45年間の研究の成果を最近発表しました。それは、『自分』と『他の命』にあとほんの少しだけ優しくなる」というものでした。これが、45年間も研究を続けた学者が最後に発表した解決策だったので、とても説得力があると感じ、いつも紹介しています。

最近、SDGsなど、難しい言葉も聞くようになりましたが、自分の問題であろうが、社会の問題であろうが、ほぼすべての問題は、思いやりの欠如で起こり、思いやりで解決できます。この解決策で『自分』が先に来ていることがとても重要です。まずは、徹底的に自分自身のことを満たしてあげてください。自分が満たされて初めて、きれいごとではなく、地球や他の人のことを考えられるようになります。

その上で、5つの大事なことについてお話しします。

・ごみを減らす、マイ箸・マイバック等を使う

特にプラスチックと食べ物のごみは環境負荷が大きいといわれています。ですが、出かけるときにエコバックと水筒のセットを持ち歩くことを癖づければ、レジ袋とペットボトルのごみはゼロになります。フードロス、買いすぎない、作りすぎない、外食の時に注文しすぎない、賞味期限を気にしすぎない、ということ意識しましょう。賞味期限はとも短く記載されています。卵は1か月、調味料は1年くらい短く記載されているといわれています。なので、あまり賞味期限を気にしすぎないようにしましょう。

・省エネをする、再生可能エネルギーを選ぶ

まず、電気の無駄遣いをしないこと。それよりも効果が大きいのが、家庭で使っている

電気を水力や地熱、風力、太陽光等の再生可能エネルギーをつくっているところから買うことです。今はオンラインで電気を切り替えられますし、たいていの場合は安くなります。

日本では、再生可能エネルギーでの発電は20%以下で、原子力発電が6%程、石炭と石油とガスでつくられた電気が約80%を占めています。一方、ポルトガルでは、国民が家の電気を切り替えた結果、再生可能エネルギー100%で国が動いています。ドイツも50%を越えました。僕らが切り替えることで、国の再生可能エネルギーの割合が上がります。

- ・公共交通機関を使う、エコカーを選ぶ

近場であれば、自転車や徒歩で行きましょう。健康や美容にも良いといわれています。

- ・牛肉、乳製品、植物性油脂を避ける

肉を減らして野菜を増やすということです。これも健康に良いといわれています。

特にベーコンやソーセージ等の加工肉は、癌になる可能性を高めるとWHOから公式に発表されています。日本では今、2人に1人が癌になっています。

- ・政府・企業・メディアに意思表示をする

これが一番大切だと思います。政府や企業、メディア等、世の中に大きな影響を及ぼしそうな存在について自分で考え、投票や購入、主張という形で選ぶこと。自分の選択に責任を持つということです。

現在、新型コロナウイルスの対応を巡って、行政の対応を批判する人が日本でとても増えています。批判することは悪いことではありません。問題は、批判している人の約半数が投票には行っていなかったんです。選ぶというプロセスは放棄したのに、選ばれた人たちがやっていることに文句だけを言うのは、「何食べたい？」と聞かれて、「なんでもいいよ」と答えながら、出されたものに文句を言うのと同じことです。

今日のような話を聞いた方が、「マイバックを持って出かけるようになった」、「投票に行くようになった」と小さな一歩を踏み出すのを見て、「そんな小さなことをやったところで…」と鼻で笑う人がいますが、逆です。そういう小さいことすらもできない人がほとんどだからこんな大ごとになっているのです。

■EUと日本の教育の違い

ヨーロッパの教育を研究する機関に行くと、ヨーロッパと日本の教育の一番大きな違いについて教えてもらいました。そこで教えていただいた一番大きな違いは、日本では「義務」のことは教えるけど「権利」のことは教えないということです。日本では、学校でも社会でも「やってはいけない」、「やらなければならない」という義務ばかりを言われます。

一方で、ヨーロッパでは「権利」について教えられる。「あなたには、生まれつき自由と権利があり、それは絶対誰からも侵害されないものだ」「他の人がもっている権利を侵害してもいけない」ということを教わります。ドイツでは、民主主義の最低限の権利として小学校で具体的にデモのやり方を教わります。

脳には義務脳と権利脳の2つがあります。日本の教育では、「やってはいけないこと」と「やらないといけないこと」の二つで頭がいっぱいになります。しかし、権利を意識することで、頭の中は「やっていいこと」ばかりになります。もちろん、一部やってはいけないこと、やらないといけないこともあります。そう考えることで、人は楽に、生き活きと生きていけるそうです。

自由や権利は生まれつき備わっているはずですが、教わっていないので意識をしていません。この「権利」を意識していないと、「生きているだけで価値がある」、「自分の行動で世界を変えられる」、「自分が好き」という自己肯定感が下がっていきます。日本政府が世界中の国々に行った自己肯定感調査によると、日本人の自己肯定感は最も低いです。「周りの人に迷惑をかけなければ何をしていても個人の自由だと思う」という問いで、世界平均ではYESが80%に対して、日本では半分の40%と低いです。最近、学校に呼んでもらったときに率直に思うの

は、「学校って軍隊みたい」ということです。学校で、先ほどと同じ質問をしてみると、YESが10%くらいで、NOが90%くらいです。多くの子どもたちが、人に迷惑をかけないとしても、自分に自由があると思っていません。授業の後で、こっそりなぜ「NO」だったかを聞いてみると、ほとんどの生徒が「やれって言われたこと以外をやると、怒られそうで怖いです」と暗い顔で答えます。なので、今は学校最優先で回っています。

日本では、自分で自分の自由や権利を否定して、義務で縛って生きている人が多いと感じています。僕は、それぞれが本当にやりたいこと、なりたい自分、ありたい自分に向かえる社会になれば、社会が明るく楽しくなって、社会問題も解決へ向かうと信じています。

自己肯定感は生まれた時は100%ですが、成長する過程で他の人と比べられることで下がっていくと言われていきます。自分に最も影響を与える言葉は、親や先生、友達や恋人の言葉ではなく、「自分からの言葉」です。自分が口から発する言葉を最初に耳にするのは、自分自身です。自分自身で勝手に人と比較をして、自己肯定感を下げていることがあります。なので、自己肯定感を上げるためには、「私は私」を口癖にして、自分だけは自分と誰かを比べないようにしましょう。あなたはあなたのままでいい。生きているだけで100点満点です。

ノミは世界で一番高く飛べます。本来なら自分の身長100倍以上飛べるのですが、どれだけ飛べようとコップに入れて蓋を閉めたら頭をぶつけてしまって、それ以上飛べません。一度、このような経験をさせると、蓋を取ってコップから出しても頭をぶつけた痛さとその高さを覚えていて、そこまですら飛べなくなります。

でも、こうなってしまったノミでも元通り飛べるようになる方法がひとつだけあります。飛べるノミを隣に置いてあげるだけでいいんです。次の瞬間から元通りに飛びます。自分も飛べていたことを思い出させてあげるだけでいいんです。

今日皆さんには、「そういえば私にも自由と権利というものがあった」ということを思い出してもらって、本当にそれを大事にして、いきいきと生きていたら、周りの人達もそんなあなたの背中に勇気づけられて、行動が変わります。そういう風に背中で見せられる人の方がカッコいいなと思いますし、僕もずっとそういう人でありたいなと思います。

スウェーデンでグレッタさんと一緒にマーチをしていた時に、4時間ぐらい歩いていたのですが、その間ずっと”So that, I can say I did everything I could do.”と書かれた段ボールを高く掲げて歩いている小さな男の子がいました。これがどういう意味かというと、「僕は僕にできることに関しては全部やった。胸を張ってそう言える自分であるために」という意味です。まだ小さな男の子がそんなことを自分で書いて一人でマーチに来て、4時間も高く掲げて歩いていることにびっくりして、喋りかけました。男の子は「僕は8歳だけど小さな妹ができた。その妹にこのまま行くと『なんでまだ時間があるうちに何もしてくれなかったの…?』と聞かれると思う。まだそんなことが理解できるような年齢じゃないけど、いつか理解をして、その時にはもう手遅れになっていて、『僕の時にはまだ間に合うタイミングで、何が起きているかも知っていたのに何もしなかったよ』なんてその子の目を見て言えるわけがない。『僕は僕にできることに関しては全部やったよ』と胸を張って言える人間でありたい」と教えてくれて、自分で聞いておいて返すことが思いつかなかったです。

でも、男の子がこれを教えてくれたときに、僕も一緒だなと思いました。こういう活動をしていると理由を聞かれることが増えて、いつもうまく説明できなかったのですが、別に褒められたいわけでも、認められたいわけでもなくて、笑われて馬鹿にされようが、悪口を言われようが、人から嫌われようが、「自分にできることに関しては全部やった」と、胸を張って言える人間でありたいだけなんです。

すごくラッキーなことに、問題がどんなに大きくても、深刻でも、時間がなくても、その問題を突き付けられた自分がどういう人であるか、どう生きるかは自分で選ぶことができます。自分の心の姿勢は絶対に人のせいにはできず、100%自分が決めています。

■最後に

今日はいろいろお話しさせてもらいましたが、一昨年に大阪でやった気候変動のパレードの動画を3分間見て頂いて、最後に1個お伝えさせてもらって、今日は終わりにしたいと思います。

社会で起きている問題も、自分の身近なところで起きる問題も、何かの問題を解決しようと一生懸命になった人ほどヒステリックになって、人に完璧を求めたり、人に自分が正しいと思っていることを押しついたりしがちです。でも、正しいの反対は間違いじゃなく、正義の反対も悪じゃないです。正しいの反対側にあるものはもう一つの正しいで、正義の反対はもう一つの正義です。正しさは人の数だけあります。

人が人を殺す戦争も、自分の身近な喧嘩も、「相手は間違っていて私は正しい」と両方が思っていない限り、喧嘩にはならないです。相手には相手なりの正義と自分と同じ、守りたいものがあります。正義は絶対に他の正義とぶつかるので、「正義」では平和は築けません。平和は相互理解、相手のことを理解して歩み寄ろうとする姿勢によって生まれます。

人間は正しさでは動けません。正しさで人間が動けるならば、問題はとっくに無くなっています。正しさでディズニーランドには行かないし、デートもしないし、鬼滅の刃の映画も見に行かないでしょう。人は正しさではなく、「楽しさ」で動くんです。人は強制されるからではなく、「共感」するから動くんです。

映像を見てもらったパレードは楽しくて、やっている途中にたまたま見かけた通行人の人たちが後ろから混ざってついてきます。最初は100人でやっていましたが、終わったら130人を越えていて、京都でやったときも4分の1くらいはたまたま見かけて付いてきた人です。

2回目に大阪でパレードをした時は、1回目の参加者が「本当に楽しいから」とお友達を誘ってきてくれて、2回目は350人以上の人が集まってくれました。

自分が正しいことをしていると行って、自己満足するのが目的であればそれでいいと思いますが、本当に何か解決したい問題があるなら、正しさには逃げずに、楽しむ工夫をして自分が一番楽しみましょう。

今日はいろいろお話しさせてもらいましたが、政府、企業、メディアといった大きいものや一部の天才、最新のテクノロジーではなく、あなたが希望です。僕らがこの気候変動の影響を受ける「一番最初の世代」でこれを止めることができる「一番最後の世代」です。

言い訳せずに、議論ばかりする口だけの人間にならずに、ちゃんと行動して悔いのないように、矢印は自分の方に向けて、楽しく、本気の大人のかっこいい背中をみんなで一緒に見せていたらと思います。

僕が今日お伝えしたかったことはこれで全部です。ありがとうございました。

(3) トークイベント② 長坂真護氏（現代美術家）

「サステナブル・キャピタリズム～地球環境課題解決に向けて～」

こんにちは。美術家の長坂真護と申します。同時に、マゴクリエーションという会社を起業して5期目で、代表をやっております。

谷口さんの話で、ものすごい地球の危機、ワールドクライシスがあつて、地球温暖化等、たくさん問題が起きていて、さっきの45分間すごく胸がいっぱいになって、へとへとになりながら聞いていました。たぶんきっと、今聞いている81名の皆さんも、どうしたらいいんだろうと考えていると思います。

ドイツのデモが起こっている映像の中でも、キャピタリズム、資本主義反対という垂れ幕も出ていましたが、僕たちはどうやってこういう社会を強く生き抜いていくのかということをお皆さんに分かってもらえたらいいなと思います。

といっても、僕はもともと4年前までただの路上の絵描きでした。住所不定で、世界15か国くらいを回り、ずっと絵を描いていました。そんな僕が4年前に、ガーナのスラム街を訪れたとき、資本主義の真実を見て人生が変わりました。

今日は、資本主義の一つの正体、真実について、先ほどご紹介いただいた映画「Still A Black Star」の予告編を用意したので、まずはこの映画を見て頂きたいと思います。

「3年前僕はこの地で、資本主義のまぎれもない真実を学びました。五万とある製品が世界中で売られ、使われ、アグボグブロシーのようなところで最後をとげます。ここでは、世界中の廃棄物がリサイクルされています。その結果、地球上において最も毒性の強い場所をつくり出しています。同時に、自分もそういった廃棄物を生み出している一人だときびきました。破綻しているリサイクルシステムにごみを捨てることで、終わりのない消費という流れに加担していました。

初めて焼却所に行ったとき、たくさんの廃棄物が地面に横たわり、焼却されているのを見たのですが、これらはまだごみにはなっていないと考えたのです。これらはまだ生きていて、使い道が残されていると。アグボグブロシーの人々の内なる声と苦悶が蓄積する電子廃棄物に溜まっていくのです。それらの廃棄物を手に取り、先進国のみんなに伝えなきゃいけないと思ったんです」

ご視聴ありがとうございます。これは、映画のトレーラーです。

■活動のきっかけ

映像は、ガーナのスラム街アグボグブロシーという町です。2017年6月に僕はたった一人でここを訪れました。ここにあるごみは全て先進国から投棄されたもので、東京ドーム32個分になります。ここに3万から8万人の集落が住んでいると言われていています。戸籍がないので統計が取れていないのですが、僕が実際に訪れたので、何万人という人が住んでいることは確実です。そういった街で僕は4年前から活動を始めました。

どうして彼らがごみを燃やしているかという、アグボグブロシーは、世界のE-Wasteの墓場と言われていて、ごみを燃やすとレアメタルやアルミ、コパという一番多く取れる銅等売ってお金にして、生計を立てています。

1日12時間労働で500円、5ドルの賃金で、ガスマスクも買わずに毎日働き、彼らは30代40代で死んでしまうと言われていています。僕が面倒をみている男の子のお父さんも、この間40歳で亡くなって、僕は今4年目ですが、我々が不法投棄したごみで本当に問題が起こっているということを目の当たりにしました。

2019年時点で50万トンのE-Wasteが投棄されていますが、2030年までにさらに40%が増え、この廃棄量のうちの14%が不法投棄とされています。不法投棄の中の数パーセントがアグボグブロシーに捨てられていて、文献によると、年間60万トンに及ぶ不法投棄が毎年行われているという現状を知りました。

当時は32歳で、路上で絵描きをしていた時に、世界で我々が発展すればするほど、貧困地の貧富化がどんどん進むという経済紙の記事を目にし、リュック1個でスラム街に飛び込みました。彼らは、我々のせいでこういった生活を虐げられているにもかかわらず、僕を受け入れて10日間生活を共にしてくれました。

世界最悪のスラム街として、現地のタクシーでも乗車拒否をされるくらいのイメージがあり、僕は第1回目の渡航で彼らに良くされていましたが、次も行くかどうか、正直自信がありませんでした。そんなとき、僕が帰る際に肩を叩かれて、「金品とられるのかな、身ぐるみはがされるかな」と思いましたが、彼らは1つだけ僕に言いました。「真護、次も来てくれるんだよね。次は、真護が付けているガスマスクを俺たちにも持ってきてほしい。僕たちも死にたくない」僕は、彼らのシンプルな心の叫びを耳にしました。

僕には選択肢が2つありました。1つは「世の中には目をつぶらなきゃいけない場所がある。自分は幸福だ。日本人で良かった。これからもこういった社会背景を胸に生きていこ

う」という、言葉を悪くすると、見なかったことにしようということです。もう1つは、谷口さんも言っていますが、「自分ができることをやってみよう」ということです。

当時は、資金も資本も全くなく、貯金も20万円くらいでした。恥ずかしながら、32歳でもそのぐらいの金額しかなく、そのお金でガーナに行っていました。「彼らを救いたい・ガスマスクを買いたい」と思っても全くお金がありませんでした。

そこで、あるアイデアを思いつきました。彼らですら、いらぬごみがあったんです。それは、この絵にあるようにプラスチックのごみです。プラスチックは、貧困国ではリサイクル技術が確立されておらず、彼らでも土に捨ててしまいます。問題は、土に還らない材料であることです。金属をもぎ取られたプラスチックの屍が地表を包んでいます。

作品に「真実の湖Ⅱ」というタイトルをつけたんですが、ごみが捨てられている場所は、もともと湖で、おそらく金属を燃やして冷ますのにすごくいい場所だったのではないかと。そこで、そこに住む純真無垢な男の子、現地にいるアビルー君という男の子の絵を書き、この湖の中に我々の責任が蓄積してごみの大地を作ったという作品を発表しました。

もちろんごみから全て作っているので材料費はたった1万円ですが、2019年に1枚2200万円という高値で販売を開始することができました。それを機に、僕は彼らへの還元・恩返しをどんどん始めていくことになりました。

まず、彼らのがんにならないための延命処置として、ガスマスクを1000個と毎月定期配布を200個始めました。そして、彼らに環境、英語、語学、算数等いろんなものを教える無料の学校を教師2名で展開しています。

新たな観光収入ということで、「MAGO E-Waste Museum」というミュージアムを作りました。これは同時に、スラムへの初めての文化施設の提供で、ここでアーティストたちは教育を受け、先進国で彼らが描いた絵を売った利益の10%をお給料に使っています。1万円の給料ですけれども、ガーナの平均給料は1カ月5000円なので、いい絵を描けば、2か月分の給料が子どもでも稼げる仕組みを、ミュージアムを通して作っています。

そして、ごみをアートにして、ごみに価値をつける「サステナブルアート」を提案し、新しいチャレンジに出ました。今、大学生の間でも資金調達で使われるキャンプファイヤーで、当時歴代一位、映画部門3,100万円を集め、先ほどトレーラーを見て頂いたハリウッド映画を作らしてもらいました。2020年に「Impact Docks Award」で4部門を受賞し、いよいよ今年10月にアメリカで公開を予定しています。

■サステナブルとは？

次に、僕がごみのアートを「サステナブルアート」に変えることに至った経緯や、SDGs、サステナブルの意味を簡単にお話ししたいと思います。

僕が初めてサステナブルという言葉に出会ったのは、2015年、年末のパリでした。11月13日のパリ同時多発テロで、当時、バタ克蘭劇場というライブハウスやいろんなところが襲撃され、150名の死傷者が出ていました。この時、僕は上海で個展をしていました。でも、こういう事件が起きて、僕の心はなぜかここに足を向かわせなければいけないと強く感じ、日本から僕一人しか乗っていないガラガラの飛行機に乗って、現地に行きました。

それまでもパリへは何回も行って、3か月住んでいたこともあり、芸術の都パリでたくさんさんの芸術を学びました。大好きだったパリが初めて死の恐怖に怯えているのを目の当たりにし、恐怖を覚えました。

当時、すごい印象的だったのは、ギャラリーラファイエットというデパートで、営業中に酔っ払いが戸をばたんと閉めました。その瞬間に全員伏せたんです。僕もものすごい身の毛がよだつ気持ちで伏せました。気丈に「テロに屈しない」と言っていたパリの市民ですら、全員が怯えていました。僕は本当にそれを忘れられません。その時、自分が先進国に住む人間として情けないなと思ったんです。

僕が描いたこの絵は2丁拳銃を持っているんですが、避妊具で人を殺す道具を否認していま

す。テロが起こる3カ月前の2015年8月に発表しました。避妊具も人を作らないマイナスの要因で、人を殺す道具も人を殺すマイナスの要因なので、掛け合わせれば中和化してゼロになって、戦争がなくなるんじゃないかと、平和な日本の百貨店で発表していました。

自分は安全な国でなんて独りよがりなアート製作をしていたんだらうと思い、そこから1カ月、絵を描けませんでした。

2015年12月の暮れに大きな満月に出会いました。満月を見て、今まで悩んでいたことや自分の欲など、いろんなものが一瞬忘れられて無になれたんです。その時分かったことは、「平和」は戦争をなくすことではなくて、芸術家として、人ひとりに心が輪になる絵を見せて、その人に平和をプレゼントすること。そういった対話は一人でもできるのではないかと思い、僕の「満月」という作品が走り始めます。

この決意の数日後、僕は運命的な出会いを果たしました。ギャラリーラファイエットで、あるロサンゼルス人の女の子に出会いました。その子と何気なく話をしたときに、「LAで何のビジネスをしているの？」と聞くと、サステナブルカンパニーでオーガニック化粧品を売っていると答えました。「オーガニック化粧品売っているのであれば、肌や自分にすごく健康なんだね」と言ったら、考えが浅いと言われました。「オーガニック化粧品を売れば売るほど有機農園が増える。我々はファンや売上を増やすことによって地球をけん引する取り組みをしている」と言われました。資本主義の中で、これだけ生産性を持ちながら、地球をけん引する方法があったのかと、僕は青天の霹靂でした。2015年12月31日にパリで、ものすごい概念に出会いました。

サステナブルは簡単です。文化、経済、環境の3つを覚えるだけでできます。彼女は、オーガニックヘルシークラブを作っています。会員を増やし、みんなでオーガニック化粧品を使うことによって、化粧品が売れます。メーカーはキャッシュを得るので、有機農園が増えます。化粧品が世界的にヒットしたり、いろんなところで増えれば増えるほど、有機農園がどんどん増えていきます。

こんな資本主義政策があったのかと驚き、当時、日本に帰って、マゴクリエーションというサステナブルクリエイティブカンパニーを作りました。

僕はその後、ガーナに渡航し、ヘルシークラブをアートに変えました。アートの売り上げをガーナのスラム街に。ごみのアート制作をすればするほど、ごみが減るといった「サステナブル・キャピタリズム」の構築に成功しました。アートが売れば、ガーナのごみが減り、コレクターはアートを飾るので、ごみ問題が周知され、ごみ問題が解決するという思想・アクションにしました。

僕は、一枚のアートが売れた奇跡をたまたまにはしませんでした。ごみを使ったアート作品を年間で625点描いています。アーティストは年間、大体5,60点を描きますが、10年分に値する数を僕は今、一人で制作しています。

去年、コロナ禍にもかかわらず、アートの売り上げだけで3億円を達成し、今年は6億円から10億円を見込むような成長をしています。我々の販売チャンネルは、「MAGO GALLERY」というギャラリー運営と百貨店、オンライン販売です。

ギャラリーは、現在日本に7店舗と、8月には香港、ニューヨーク、パリ、ロサンゼルスにオープンします。我々の行動は「サステナブル・キャピタリズム」のムーブメントを世界中に広げています。

百貨店の展覧会では、ごみのアートに2万人が来場しました。これは、谷口さんも言いましたが、人を動かすのは知識ではなく何か楽しいこと、「エンターテインメント」であるというのは、僕らも同じ認識です。辛いことばかり発表している事業や慈善事業は限界がきます。365日その胸を持って生きていると、僕らがへこんでしまいます。

中には、涙を流しながらアートを見て、感動して下さる方もいますが、純粹に絵をコレクションしたり、アートを見て楽しむといったエンターテインメント化を目指しました。

そして、2カ月前の新宿伊勢丹店の展覧会では、美術展歴代1位の売り上げを達成しました。世界一位の売り上げを誇る伊勢丹がごみを売る時代が来た。ごみを売る時代と言うと語弊がありますが、「持続可能な社会に価値がつく時代」がもうここまで来ていることを立証できたような瞬間だったと思っています。

■今後の活動について

僕は一起業家としてマゴクリレーションという会社を作り、今までに10億円以上のアートを売ってきましたが、ただ単に資本主義でお金持ちになりたいという気持ちは一切なく、2030年までに100億円の規模に膨らませ、ガーナにリサイクル工場をプレゼントしたいと思っています。冒頭のスライドにあった、「死にたくないからガスマスクを持ってきて」と言われたあの時の気持ちから何も変わっていません。1万世帯はある雇用を全創出するような、最先端の工場をプレゼントしたいです。おかげさまで、我々は数億円のキャッシュを得たので、2021年にコロナのワクチンを待って、「第一リサイクル工場」を年末から稼働させていきます。

今日持ってきた人形のミリーちゃんは、目や髪の毛などの、現地の大地を現したものはガーナのごみでできていますが、皮膚や靴の部分は、ガーナにも捨てられたE-Wasteを細分化し、きれいにして、日本の工場で作られた「リサイクルペレット」というもので作られています。「リサイクルペレット」は魔法のチップで、ナイロンの生地やプラスチックのおもちゃなど、いろんなものをつくるのが出来ます。ミリーちゃんは絵具以外、100%廃棄のE-Wasteでできています。

「ミリーちゃんプロジェクト」では、第二のアンパンマンを目指し、道徳アニメを作ろうとしています。アンパンマンは「強いものが弱いものを守る。何があってもあきらめない」最高の道徳アニメであると同時に、最高の商業アニメです。みんながおもちゃを買うので、商業性も道徳性もあって、とても良いエンターテイメントですが、唯一欠点があります。顔が濡れることじゃないですよ。環境負荷が高いことです。

石油製品でおもちゃが作られているので、消費社会の構造の上では地球負荷を高めてしまっています。我々は全て「リサイクルペレット」を使って作るプロジェクトをしていきます。

文化・経済・環境の「サステナブル・キャピタリズム」で、アニメという文化に変え、グッズを売ることによってお金を作り、実質的にプラスチックごみを減らします。アーティストは一人の活動ですが、世界中に配置したギャラリーで、皆でできるような活動として、ミリーちゃんと一緒に状況を変えていこうと準備をしています。

ミリーちゃんの人形は、ごみを破砕したものを熱で溶かし、3Dプリンターにだして積み上げたもので作っています。この技術を使って、僕らが大阪万博でやりたいことがあります。

今、月の塔、7 mの「ムーンタワー」をメインモニュメントとして、ガーナのミュージアムで展示しています。真ん中に光る月のオブジェは、現地の子供たちと川に流れついたペットボトル等を拾って、全部編み上げて大きいランプシェードを作りました。これの最先端版を大阪万博で発表したいと思っています。

これは僕の作品ではないです。ごみを一個でも寄付した人全員がムーンタワーの作成者となれるような、共創力を高める作品になっています。もちろん、自然エネルギー100%です。僕の構想では、宇宙に向けたアンテナになっていまして、宇宙の電波をキャッチしてその電波を音に変え、「ムーンタワー」を見ているみんなが宇宙の音をリアルタイムに聞ける、そんな装置にしたいと思っています。

なんでそういうことをやりたいかという、僕がパリで見た満月です。あの時のヒーリング作用が宇宙空間にあることに最近気付きました。34万キロ先の月が分かるのは、太陽の反射の光で、それを見て僕は心が輪になりました。考えてみると、我々は壮大なものを見たり感じたりすると、いかにちっぽけで、地球の中の一生物として生きているかを体感できるので、それを体現したいと思っています。

この月の塔は、日中暖められたソーラーパネルで充電をして、夜はその日の日照量で点灯時間が変わるといったエシカルなものにしたいです。それだけ、太陽のありがたみを感じるものになると思っています。

大阪万博が開催されたのは半世紀前です。ペットボトル等の石油製品が出始めたのも半世紀前でした。我々の発展の方が、地球環境よりもプライオリティが高かったと思います。当時のEXPOは、最先端技術や超近未来といったものを展示するものが多かったのではないかと想像できますが、岡本太郎が建てたその時のエネルギーの象徴は、「太陽の塔」でした。これに照らされる「月の塔」は、超循環型社会を作っていかなければいけないと考えています。

「太陽の塔」ができてからたった50年で我々はものすごく地球をぶち壊してきました。我々の知恵は超環境破壊を起こしてしまって、自然サイクルよりも消費サイクルが早かった証拠だと思っています。でも、自然のサイクル以上に超循環型社会を作るのも、地球で唯一の知的生命体の我々しかできないと考えています。持続的な社会を作り上げるのは間違いなく我々です。

忘れて欲しくないんですが、僕は今日、こういう場所で講師としてお話をさせてもらっていますが、本当に貧乏で世界10何カ国の路上で絵を描き続けて、世界中の主要都市のギャラリー500店舗を回って「僕の絵を買ってください、僕の絵で個展を開いてください」と売り込みをしていました。僕、僕、僕、僕、全部自分のためでした。全く誰にも相手にされなくて、32歳まで母親からろくでなしと言われ、家賃も払わずに1年間家に転がりこんだり、当時付き合い合った彼女や友達の家を転々としていました。僕は、ガーナのスラムに出会って、彼らの笑顔に出会って、心が変わりました。

サステナブルはすごくシンプルです。「文化」はただ楽しむだけです。環境問題とか社会貢献と言いますが、地球をきれいにしようってことなんです。

これから若者や学生の子たちで起業したり、仕事したいと思っているみんな、海外とかでデモを起こしている子たちは、今の資本主義社会に不満があるが、どうしていいかわからないからデモをしています。だったら、地球を綺麗にして、楽しくお金を作る方法を考えればいいと思います。僕は、ガーナのごみを減らす仕組みを一生懸命考えています。

実は今、世の中の投資家やお金を持っている人達、ステークホルダーはお金が余っています。アイデアが古すぎて、出資するところやお金をプレゼントする場所に困っています。勇気を持って、次世代の「サステナブル・キャピタリズム」、「サステナブルワーク」をやれば、楽しんで地球をきれいにしてお金を稼げます。もうネガティブキャンペーンはやめましょう。ポジティブに超循環型社会にできるのは、絶対に人間だと思っています。

僕がこのクリエイティブアクションを通して皆さんに本当に言いたいのは、「たった一人の行動」ということです。当時、貯金も20万円しかなくて、何億円の工場を作るとか、アニメや映画、世界中にギャラリーがあると申しましたが、4年前は1つも持っていませんでした。たったこの数年でここまで来ました。僕は100億円という投資で、自分の実業によって彼らに恩返しをしていきます。これは、今日みんなに約束をします。

僕が特別な人間じゃないということだけ、すごく分かってほしいんです。4年前までは、たった一人の絵描きでした。すごいシンプルに言うと、もうテクノロジーはいろんなものを用意してくれました。これは、先人たちの努力だと思っています。我々が平和を手に入れるために、おじいちゃんとかお父さんとかが一生懸命働いてくれました。だからこそ、僕たちはデモ活動や平和的思想を討論できるようになりました。数十年前まで、こんな会話すら許されていなかったと思います。

全てのものが用意された今の時代に求められているのは、たった一つです。才能があることや知識があることではないです。「勇気を出すこと」このひとつだけです。みんながやっていないからやらなくていい。この状況はおかしいけど、おかしいと思ったら否定されるかもしれないから、声を上げるのをやめよう。その逆をやってください。

僕は「資本主義はおかしい。何で同じ人間なのにこんなに差があるんだ」って、勇気をもって声を上げました。僕は馬鹿だし勉強もできないし、人との関わりもすごく苦手でした。

でも、勇気をもって声を上げたその一言が、今の時代、全世界に SNS があり、メディアを通して世界中に張り巡らされる仕組みがあります。

みんなが求めているものはあなたの「勇気」です。楽しいことを、自分がやりたいと思ったことを、自分ごとではなくて地球ごと、それを楽しく、お金を稼いで、その稼いだお金を次世代の若者達に託してやってください。たった数年で我々は地球を変えられると思います。

僕の伝えたいことは言えたので、今日はこのくらいにしたいと思います。マゴクリエーション代表 長坂真護でした。ありがとうございました。

(4) アイデア発表 「万博×環境 未来を描こうプロジェクト」学生メンバー

令和元年度に、2025年大阪・関西万博に向け、多くの若者（高校生・大学生等）から、実現して欲しい環境・まちづくり等の様々なアイデアを集約して発信する、「万博×環境未来を描こうプロジェクト」を立ち上げ、万博に向けた提言アイデアのとりまとめなどに取り組んでいる。今回は、企業や関係団体等の更なる協力を得て、継続して検討していくため、また若い世代の意識啓発と取り組みの促進を図るため、2020年度チームメンバーによるアイデアプレゼンを行った。

・つくる責任つかう責任：橋本 碧さん

最初に、私たちのチームについて紹介させていただきます。私たちは、SDGs17の目標の12個目の目標である「つくる責任つかう責任」チーム、通称3Rチームと呼ばれています。私たちは3Rの中でもReduceを大切にしている、近年問題になっている「プラスチックごみ（ペットボトルごみ）」に焦点を当てて活動しています。

「2025年に万博敷地内でのプラごみゼロ」という大きな目標を掲げ、目標を達成するために、万博でのプラごみゼロに向けたヒアリングや実証実験、達成するための仕組み作りを行い、博覧会協会へ提案しようと考えています。また、万博が終わった後は、考えた仕組みを大阪から日本全国、世界に発信していこうと思っています。

目標を実現させるための具体的なイメージは、万博規格のタンブラーを作り、規格に合った自動販売機の設置です。万博敷地内のレストランやカフェ、コンビニでも利用できるように仕組みを考えています。他にも、カップの洗浄ブースの設置や、万博後にもタンブラーを継続して利用できるようにするために、万博規格を公開規格にしたいと思っています。

プロジェクト達成のメリットは、プラごみの減量や脱水防止のほか、参加企業が、Z世代やミレニアル世代等の小さい頃から環境に関する教育を受けてきた若者からの支持を獲得できることです。また、万博規格が環境問題に取り組んでいく指標となり、環境問題への意識醸成ができると考えています。

公開規格にすることによって、今まで競合していた企業同士の繋がりをつくること出来ます。多種多様な企業に参加してもらえば、様々なカップを持てたり、飲める飲料も増える等、消費者側のメリットもあると思っています。また、中小企業も参加できるようになり、大阪の中小企業の応援、地域活性化にも繋がります。

さらに、万博でプロジェクトが成功すれば、企業を越えたシステム運用の実例として「大阪ブルーオーシャンビジョン」を達成し、新しい可能性を世界に示すことができるのではないかと考えています。

これまで、魔法瓶水筒メーカーや飲料水・自販機メーカー、飲料水メーカー、コンビニエンスストア、大阪府の食の安全推進課にヒアリングを行いました。今後は、消費者視点として、大学生アンケート調査を行う予定です。これからの問題点としては、カップ洗浄は自己責任か、提供者責任かという「衛生面の問題」等が挙げられています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

・SDGs Point：佐藤 由惟さん

私たちが掲げる目標は、「みんなが将来に向けて、SDGsに向けて“行動”できる社会の実現」です。そのために考えている政策は「SDGs Point」です。これはお得に環境に貢献できる地域通貨アプリです。

どのようにポイントが付与されるのかというと、環境に良い行動をすることで、ポイントがたまり、様々なことに使えます。例えば、マイカップを持参しボランティアに参加すると、「SDGs Point」がたまります。

ポイント交換の想定例ですが、今回はSDGsの14番の目標「海の豊かさを守ろう」に沿ってご紹介します。海の勉強会への参加やごみ拾いボランティア、水族館へ行くことでポイントがたまります。たまったポイントは、観光権利やチケット、プレゼント、万博での利用等に使えるよう構想中です。

また、小学生の利用イメージですが、地図上で環境ボランティアや勉強会等を調べ、参加することでポイントが手に入ります。項目ごとに累計ポイントが分かる仕組みも考えています。2025年に控える万博での活用や、社会見学でごみ処理場や水道局のようなSDGsに関する施設を訪問する等、教育にもアプローチしようと考えています。

それぞれのメリットについてですが、ユーザーはお得に環境に貢献でき、報酬を得られ、社会的信用や評価に繋がりますし、SDGsに貢献する店舗・企業は商品やサービスの価値が高まり、認知度向上や利用促進できます。出資企業に関しては、ブランド力の向上やESG投資に繋がります。特に、ユーザーの社会的信用についてですが、どれだけSDGsに関心があるのかという数字の証明や、どの分野に力を入れているのかが分かり、自己分析に繋がると考えています。

今後の展望としては、アイデア実現に向けて原資や運営資金の調達の検討をしており、これが一番問題です。また、「脱炭素ポイント」を検討している大阪府に、SDGs Pointのアイデアを提案しようと思っています。

以上で、SDGs Pointの発表とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

・学生万博構想：夏山 空さん

学生万博プロジェクトのコンセプトは「大阪・夢洲で世界中の学生が、生まれた環境に関わらず、夢にチャレンジできる社会の創出」です。途上国だけでなく日本でも、ひとり親家庭などの相対的貧困が増え、格差が生まれています。所得だけでなく教育の格差に繋がり、将来の人生設計にまで影響を及ぼしている負のスパイラルを変えていきたい、これからの未来社会を生きて作っていく世界中の学生の力が何よりも重要と考え、学生万博プロジェクトに取り組んでいます。

学生万博でやることは3つです。それぞれに「つながる」「つくる」「たのしむ」というテーマを設けています。未来社会の話をするだけでは興味のない学生もいるので、みんなが楽しめる万博にしたいと考えています。

1つ目の「学生万博会議～つながる～」では、セミナー開催や自分がどういう未来社会をつくりたいかを議論する場にしようと思っています。2025年の開催に向け、まずは、日本万博博覧会協会の森清副事務総長にも来ていただいて、「第一回学生万博会議」を開催し、76名の学生が参加しました。現在、関西学院大学と第2回を企画中で、8月に開催予定しています。自分の作っていききたい未来社会を話し、フィードバックをもらうような場づくりを行い、今後は、関西中の大学を回っていこうと考えています。並行して、学生万博勉強会も行っています。

2つ目の「学生万博パビリオン～つくる～」は、技術開発をしたいという学生のサポートを行うことを考えています。

3つ目の「学生万博LIVE～たのしむ～」は重要だと考えていて、今年の8月に共創パートナーである「みせるばやお」と協力し、無観客で学生万博LIVE2021の配信を予定しています。Youtubeでの配信も予定しているので、楽しみにしてください。

SDGs目標では、1番「貧困をなくそう」と4番「質の高い教育をみんなに」を達成に寄与したいと考えています。また、大阪にとっても夢洲が学生の中心地となることで、夢洲の付加価値が上がり、世界中の学生が集まるため、大阪関西万博のレガシーの継承にも繋がると考えています。

今後は、万博に向けて年々パワーアップし、万博後も活動を行い、夢洲が学生の拠点になるように頑張っていこうと思っています。ありがとうございました。

・大阪防災プラットフォーム：多田 裕亮さん、峯 有紀さん

大阪防災プラットフォームでは、「災害に強い大阪を実現するために、産官学民による防災活動の共同体」をつくらうと考えています。自主防災組織や行政、企業、教育機関等のいろんなステークホルダーが参画することによって、普段から横のつながりを強化し、有事の際にみんなが一丸となって災害に立ち向かえるようなプラットフォームの構築を目指しています。

大阪府ではNPOとの関係強化や、いざというときに物資の提供をするために、企業との防災協定をたくさん結んでいるものの、自主組織同士やボランティア団体同士の横のつながりは希薄です。僕自身、関西で防災活動をする中で繋がりなきを実感し、横のつながりをつくるために、関西で学生を主体に防災活動を行う個人・団体間でオンライン交流会を実施する等、昨年度から繋がりをつくる活動を続けています。

大阪府の行政はたくさんの災害対策を行っていますが、大阪府民には伝わっていないという課題があり、府民の防災意識は全国に比べても低くなっています。そこで、防災に関心のない人に興味を持ってもらうきっかけづくりとして、防災と他の分野を掛け合わせ、大阪府民の防災意識向上を図れないかと考えています。

現在はファッションに着目し、プロジェクトを進めています。コンセプトとして「防災をもっとおしゃれにスマートに」を掲げ、防災には興味がないが、ファッションに興味がある方にアプローチします。

大阪発のアパレル企業であるアーバンリサーチは「TEAM EXPO 2025」という、万博をきっかけとしてSDGs達成に向けて動いていく共創パートナーであったことからお声がけし、企業連携で防災啓発プロジェクトを企画する運びとなりました。

本日のご講演にもあったように、いかに自分事化するかが社会課題のキーになると考え、「若者が防災を自分事化する機会を提供する」ことを目的に、普段使いできるような防災グッズの開発を進めています。「防災グッズは普段使えない」というイメージを変え、それを購入してもらうことで災害に強い環境づくりに貢献できるような仕組みをつくらうと考えています。今年中にプレスリリースする予定なので、ご期待いただければと思います。

今後は、大阪防災プラットフォーム実現に向けて働きかけるとともに、「防災×ファッション」プロジェクトを進めていきます。メインはプラットフォームをつくることですが、プラットフォームが実現された後の具体的なモデルケースとして、アーバンリサーチと協力し、プロジェクトを進めていきます。活動を通して、防災活動をより活発にし、意識をより高くすることに貢献できればと考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

(5) トークセッション 「アート×社会×アクション 先駆者と語る 地球の今と未来」

花田教授 これより、ゼロカーボン・ダイアログのトークセッションを開始したいと思います。私は、これからのセッションの進行を務めます、大阪産業大学の花田と申します。よろしく願いいたします。

さて、今回はコロナウイルスの感染拡大防止ということで、リモート開催となりましたが、遠方からのご参加もいただいております、リモートならではの利点も見えてまいりました。参加者の皆様とリモートではありますが、一緒に考えていければと思います。

現在、人類がコロナと気候変動という大きな2つの危機に直面していると言われています。2つの危機にはいくつかの共通点があると思っています。まず、影響が地球上のあらゆる国や地域に及んでおり、原因が我々の経済生活のあり方や地球環境・自然との向き合い方、距離感が関係していると言われていたこと。

それから、その解決のためには人類全体が制度や技術、暮らし等、あらゆる面での取り組みが求められることです。

危機を乗り越えるために必要なのは、元の世界に戻るのではなく、誰一人取り残すことなく、より良い世界を実現していくことです。講師のお二人のような若い活動家の方々の発想力と行動力が推進力となるだけでなく、様々な立場や分野の方と化学反応を起こすようなやり方がパートナーシップではないかと思いました。若い方々の活動や考えを通じて、新しい視点について考えていきたいと思っています。

■チャットへの質疑応答

花田教授 では、まずは参加者の方からチャットをいただいています、その中でご質問が来ていますので、お聞きしていこうと思います。

まず、谷口さんへのご質問から読み上げさせていただきます。

「現在の気象状況は以上だと思っています。産業革命後に人が地球にもたらした負担は、人が生きやすくするために行なってきたはずの開発によって地球が悲鳴をあげ、人への負荷が帰ってきていると感じています。

ただ、地球が誕生してから暑い時期と寒い時期が周期としてあり、私自身温暖化がその周期の途中なのかと思うことがありますが、今の気候変動は地球の周期の一つではないかと考えることはありますか？」ということですが、お伺いしてもよろしいですか？

谷口氏

はい、ありがとうございます。まず、人を生きやすくしてきたはずの開発によって地球が悲鳴をあげているのは事実だと思います。ただ、環境活動家として忘れたくないのは、悪意を持って開発した人はいないということです。その時代を生きた人たちがその時代に合った物質的な豊かさの欠如や課題に取り組んだ結果、その反動として新しい課題が出てきて、その課題に今を生きている我々が取り組むという繰り返しだと思っています。

また、地球が寒冷期と温暖期を繰り返してきたのは事実ですが、産業革命から200年ほどでの温度変化は、これまでの地球上の一番激しい温度変化に比べて10倍から20倍のスピードで温度が上がっていて、異常とされています。

NASAの発表や、2017年に世界中の気候学者たちを取られたアンケートでは、97%以上が人間の活動のせいで地球温暖化が実際に起きていると回答していますが、3%未満は違うことを言っているというのも事実です。

ただ、今、温暖化が起きていても起きていなくても、人間が環境を自分たちの都合で破壊しすぎていることは議論を待たないと思っています。

温暖化対策は、行き過ぎている環境破壊を立ち止まって見直すことだと考えているので、どの説を信じるかは個人の自由ですが、温暖化が起きていないからといって、環境破壊をし続けることを正当化するために温暖化を否定するのは違うのではないかと思います。

花田教授

ありがとうございました。ご納得いただけましたでしょうか。

続いて、長坂さんのファンの方からのご質問ですが、「ミリーちゃんプロジェクト」について、アンパンマンに変わるサステナブルなアニメを制作するという話がありましたが、具体的なことが決まっていればお話いただけますでしょうか？

長坂氏

はい、僕の活動をどこかで見てくださっているようで、ありがとうございます。ミリープロジェクトは、7月7日から東京大丸デパートで発表する予定です。30秒程のショートムービーをウインドウで見ることができるよう準備していて、百貨店では、動画の公開やミリープロジェクトの作品を10mぐらいの空間に

かなり大きく展示を行います。

ミリープロジェクトでは、おもちゃの作り方を変えていこうとしています。今までは石油をペレット化したバージン材と呼ばれるものを、我々が技術や場所を提供し、現地の人が労働をしながら、ガーナに投棄されるプラスチックごみをリサイクルペレットに変えて、ごみを減らしていきながら、ガーナのごみを何万トン排出できたかを可視化し消費者が分かるようにして、それと関連するような事業内容を随時発表していこうと考えています。

花田教授 ありがとうございます。ミリーちゃんはとても魅力的な存在だと思いました。「成り立ちやこういう意味があるから、みんな価値を認めてね」ではなく、まず商品やサービスに価値や素敵さがあって、その裏にサステナビリティがあるというのがとても素敵だと思いました。

それから、もう1つご質問がきていまして、お二人にご回答いただければと思っています。「楽しさと共感を環境活動に取り入れることの大切さを実感している一方で、協働というキーワードがあり、様々なステークホルダーと協働連携することが求められていますが、それについてどのようにお考えでしょうか？ご自身の活動から協働の大切さや必要性もしくは、そもそも必要ない等のお考えも含めて、お聞かせください。今後の活動のヒントにさせていただきます。」とのことですが、いかがでしょうか？

谷口氏 僕もそう思います。協働は大切で自分自身も意識しているからこそ、先ほどもお伝えした正しさや強制じゃなく、楽しさや共感を意識しています。

もう1つ大事にしているのは、否定や攻撃をしないことです。例えば、石器時代が終わったのは、石が枯渇したから終焉を迎えたのではなく、鉄器という、より魅力的なものが生まれ、みんなが鉄器を使ったから終わりました。実際にルクセンブルクでは、環境問題を解決するために、車を禁止するのではなく、バスや電車等の公共交通機関を全部無料にしたことで、公共交通機関の利用者が増え、結果として車の利用者が減って、環境が劇的に改善しています。

時代を変えるために既存のモデルを否定したり攻撃する必要はなくて、自分のやっていることの魅力を発信する方が良いと思っています。自分たちがやっていることを魅力的にすることに時間とエネルギーを注ぐことが、協働に繋がるとしています。

花田教授 先ほど谷口さんがおっしゃっていた義務と権利の話にも繋がると思いました。例えば、北欧にある自然享受権では、そもそも自然を尊重し、再生を妨げるような利用は絶対にしてはいけないという前提があって、権利があります。そこが素敵だと思っていましたが、それを思い出すような話でした。ありがとうございます。続いて、長坂さんはいかがでしょう？

長坂氏 協働は初めて聞いた言葉ですが、常に似たような考えは持っています。5年前は、アフリカを救うと言えば、募金箱持って寄付を募るといった風潮でしたが、自分のやりたいことは、サステナブルビジネスで、フェアトレードを行いながら、皆を巻き込んでいくエンターテインメント性のある事業でした。でも、エンターテインメント性を強くすると、アフリカと言えばお涙頂戴で、最後に寄付金額を決めてくださいというようなものがあるじゃないですか。

その団体が悪いわけではなくて、僕が特化したいのは、楽しさをビジネスに入れることです。サステナブル・キャピタリズムで「文化」を推す理由は楽しいからです。僕は、毎日楽しんで絵を描いて、映画やアニメ制作を行っていて、楽しいから365日地球のために活動できています。皆さん資本主義なので、365日仕事はすると思うんですが、僕はそこに「地球をきれいにするって楽しい」

を入れることを大事にしています。

我々は生まれた時から資本主義やお金という概念を刷り込まれているので、稼ぎたいし、地球環境さえよければ死んでもいいとはならないですし、同じ紙でも99.9%の人は、1万枚のメモよりも1枚の1万円の方が欲しいと思います。

例えば「作品で石油製品の絵の具を使っているので、書けば書くほど地球汚れますよね」とか「ガソリン車に乗ってきたらCO2出している」と言われますが、言いたいことは分かりますけど、社会や文明は一人で作れるわけがないと思っています。

アーティスト志望の学生に、「スケッチに書くだけで環境負荷が始まっていると思って辛い」と言われたことがあります。僕はその一枚のスケッチに何を書くかだと思ふんです。その一枚を壁に貼った時に、それを見た1万人の行動が変わって紙の使用を半分にしようと思った瞬間に、何万、何十万枚の紙の削減ができて、どれだけの環境整備・保全に繋がるかということで、それを悲観してしまったら、旧石器時代に戻らないといけないという話になりますが、みんなそれはできないと思います。

僕が活動をしている間、船はソーラーシステムや水素のエネルギーだけで動くようになるとか、車がオートメーション化するとか。一人が頑張っただけで全責任やレスポンシビリティを受けて解決するのではなく、1つのことにフォーカスし、自分の事業について環境、文化、経済の3つをしっかりと考えて特化するだけでいいと思います。それらがいいバランスで調律しあって、気付いたらサステナブル、エシカルな時代が来ているのではないかと考えています。

話が長くなりましたが、自分以外のことを否定する前に、自分のことをやる。そういう人が増えれば、絶対に世間が良くなると信じています。僕が制作した作品を見て、単純に楽しむ人や電力やエネルギーを考えようという人が増えていけばいいと思っています。それが共生・協働のあり方だと思います。

花田教授 ありがとうございます。長坂さんは、楽しんでいる先に、実は啓発や地球にいいことがあるというシステムを考えられたところがサステナビリティだと思います。

協働で言うと、先ほど谷口さんが、みんなが知らないことが希望だとおっしゃっていましたが、私も熱心に取り組んでいっしょな市民の方や先生方と一緒にすると、熱心な方ほど「なんでみんなはしないんだ」とか「どうしてこんなに大切なことが分からないんだ」と思われてしまうのを、すごく残念に思っていたんです。

人が動くことにはいろんな方向があって、楽しいで動く人や、お得で動く人、倫理的な気持ちで、エシカルということで動く人もいます。それを考え方が浅いとか非難する必要はなくて、一人の百歩より百人の一步と考えて、協働に関して、いろんなやり方でお誘いいただけたらいいのかなと思いました。

■学生プレゼンの感想について

花田教授 次に、先ほどの学生のプレゼンについて感想をお願いできればと思いますが、まずは谷口さんからよろしいでしょうか？

谷口氏 「つくる責任つかう責任」の橋本さんの発表では、万博をゼロWasteで行いたいというだけでなく、万博をきっかけとして活動を展開していくことを捉えられていることがすごいと思いました。規格を取りに行くのは、一番難しい部分だと思いますが、規格をとってしまえば二人目以降だと変えるのが面倒という理由で最初のままのこともあるため、スピード勝負になると思うが活動を続けてほしいです。

もう一つは、容器にこだわってもらえると面白いと思います。例えば、ドイツの大学生がコーヒー粕を圧搾してタンブラーを作っています。これも1つのサステナブルで、大阪ならではの、普段捨てているものをベースに容器を作るところまで行ってもらえたらすごく面白いと思います。

「SDGs Point」の佐藤さんの地域通貨のアイデアは大好きです。僕自身、社会で起きている諸悪の根源がだいたいお金の仕組みだと思っていて「今だけ、金だけ、自分だけの社会」と呼んでいます。お金で買える全てのものは時間と一緒に価値が減っていくのに、お金だけが1万円札は10年経っても1万円の価値があるという不老不死の仕組みが、相対的にお金とお金で買えるもののバランスを崩しています。

お金も時間と一緒に腐らせようということで、ドイツのキームガウアーでは、1カ月で1%、1年間で10%ほどなくなっていく仕組みで、地域通貨を行っています。世界で一番成功している地域通貨として海外メディアから取り上げられており、これまでに10億円を発行し、地域も地域通貨で回っています。

相対的にお金を弱くした結果、環境に目が向き、植樹やオーガニックのものづくりを行う人が増えていますし、お金が腐っていくとため込まないので経済にも良く、20世紀に同じような仕組みが流通していたオーストリアでは、たった1年間で5人に1人が失業者という大不況でしたが、失業者やホームレスが0になりました。また、地域通貨の決済にかかる税金で税収が8倍に増え、福利厚生が充実し、歯医者以外の病院や学校が無料になっています。

減価型の仕組みは出資企業にもメリットがあり、付与したポイントが使われなかった場合、半永久的に企業のB/Sシートと呼ばれる貸借対照表で負債の方に溜まっていくことがハードルになりますが、時間と一緒に価値が減っていけば負債は溜まらないです。

さらに、価値が減るだけでなく、自然に使わなかったポイントが環境保全活動を行っている団体や保全活動に回される仕組みにすれば、もっとたくさんの人の賛同を受けやすいのではないかと思います。

学生万博構想の夏山さんのアイデアは、学生ならではの多くの人を取り込もうとするスタンスに共感できました。僕もイベントに呼んでももらえると嬉しいです。

大阪防災プラットフォームの多田さんと峯さんのアイデアでは、防災についてたくさんの人に知ってもらうために、ファッション等のジャンルを取り込もうというのがすごく素敵だと思いました。

さらにターゲットとして入れてほしいのは、損保業界です。火災保険等の防災のための保険料は、ここ4年間で3回値上げされ、2割程上がっています。例えば、2018年に大阪で起きた台風21号の保険料の支払いは1兆円を越えていて、今まで1年間通して一番多い年で2004年の7000億円程だったので、一発の台風で過去最高金額となり損保会社が困っています。

同じ災害が起きても、防災さえしっかりしていれば被害が減り、保険の支払いが減るので、巻き込もうとしたら喜んで食いついてくると思います。

花田教授 ありがとうございます。お待たせいたしました。続いて、長坂さんよろしくお願いたします。

長坂氏 はい。今回発表してもらったプロジェクトについて、本当に起業ベースで、本気でやりたいっていうのはどのくらいいますか？

佐藤さん SDGs Pointでは、アプリ開発で三菱総研の方が関わってくださって

動いています。資金の調達の方法や資金源をどこから集めてくるかを、学生の間で考えています。

長坂氏　　今はピッチコンテストやスタートアップ等、超大手企業ではアイデアがなさすぎて若い子達と一緒にやりたがっていることが多く機関もたくさんあるので誰かがやってしまう前に、すぐにやったほうが良いと思います。

SDGs Pointはアイデアが良いので、起業して大阪府のパートナーとして民間の企業で入っていくのも良いと思います。あとは、ESD投資家たちは元気なので、本気で企業したいのであれば、資金調達ベースでやっていくのが良いと思っています。是非SDGs起業家になってほしいです。

資本主義や競争原理主義のため、富裕層やトップにお金が回るようになっていきます。こんな世の中だから、僕は「富の再分配」を結構考えて行っていて、前澤さんと一緒に500万円ずつ出して1,000万円を配布もしました。今後、地球を守る若き起業家達に寄付ではなく、お金をあげてもいい時代が来ると思っています。

資本主義を否定したところで世の中は変えられないので、サステナブル・キャピタリズムを発信している。将来、資本主義という概念がなくなる時代が絶対に来ると思っていますが、今は過渡期なので、1つのステップとしてサステナブル・キャピタリズムを発信しています。

必要なのは、アイデアやビジネスに対する意思や勇気だと思います。学生枠を脱ぎ去って、命をかけてやる人が出てきて、全部動かすぐらいのビジネスモデルを作って欲しいです。

花田教授　　長坂さん、ありがとうございます。投資家のバフェット氏が9割程の資産を寄付すると言っていて、今回の話も含めて、お金の価値が少し変わってきているように思いました。それから、長坂さんが伝えているサステナブル・キャピタリズムの裏には、持続可能性というものが価値として認められてきた社会なのではないかと思い、社会が大きく変わってきていると感じました。

長坂氏　　今までの生産活動は文化の提供と経済だけで、文化の提供と環境保全をやっている人たちと分断されていたと思います。ここ2、3年で急に、国やメディアがSDGsを言い始め、投資家の中でも、脱酸素、サステナブル、ESG経営の事業にしか投資してはいけないというルールもでき始めています。

資本主義のため、お金が集まるところに事業が生まれますが、逆に言うと、投資家のお金が余っている理由は、今の新しいイデオロギー、社会思想の中で新しいサステナブルなビジネスモデルを提案できてないからだだと思います。言い方が悪いですけど、学生たちも本気でやりたいのであれば、学生をしている場合ではなくて、学生起業をやれば良いと思います。自分たちでマーケットを作っていくぐらいの気持ちがあれば、お金は勝手に集まってきます。

花田教授　　長坂さんのお話を聞いていて、2015年は12月にパリ協定、9月にSDGsが採択され、長坂さんがサステナブルを知ったのもこの年だということで、様々なことが動いた年だったと思います。

キャピタリズムについては、谷口さんが気候変動で失うものは平和だといったが、社会にとって重要な社会的共通資本（医療、教育等）をお金や資本の論理で考えると困ったことになるとおっしゃった宇沢先生も、一番の社会資本は平和だと言っていました。今のESG投資など、金融によって社会を変えていくのであれば、そういう活動にお金を使ってもらうのが良いのではないかと思います。

■メッセージ

花田教授 最後に、お二人から参加者の方へメッセージをいただければと思いますが、
お願いできますでしょうか？

谷口氏 はい。このような機会を頂きありがとうございました。対話といった形でお
話を交換するのは好きですが、ここで終わってしまっただけは何の意味もないため、
是非行動に移していければと思います。

長坂氏 皆さん、今日はありがとうございました。学生も様々な環境問題に興味や関
心があって研究等をいろいろしていると知って、あとは勇気だけだと思いまし
た。発表会だけで終わるのはやめてほしいです。厳しく言うわけではなく、そ
れが社会の厳しさなので、その辺りを自分の心に持てば、誰も持っていないアイ
デアが勝手に湧いてきます。パッションとか気持ちとか行動力を持ってほしい
です。先進国は仮想平和で、心が不幸だったり貧乏だったりするので、それを
ぶち壊すジャンヌダルクも出てきてほしいと思います。

(6) おおさかATCグリーンエコプラザ 事業・施設紹介

アジア太平洋トレードセンター株式会社 北澤課長より、おおさかATCグリーンエコプラ
ザについて、企業の環境配慮製品・サービスの普及、環境コミュニケーションの促進、環
境ブランドの構築・訴求、環境学習の提供、環境CSR活動やSDGsへの取り組みの紹介等を目
的に運営していると紹介があった。

(7) 閉会挨拶 東実行委員長（おおさかATCグリーンエコプラザ）

みんなが知れば世界が変わる、自分のこととして気づき、考え、少しの勇気をもって行
動することが必要だというメッセージがみんなに届いたと思うとお話があった。

おおさかATCグリーンエコプラザでは、情報発信や情報展示、パートナーシップの推
奨をもって、地球環境問題に取り組んでいきたいと思っていると説明し、本イベントを閉
会した。